

第163回 鶴見大学図書館 貴重書展

◆ 令和七年度中世文学会春季大会開催記念

新古今和歌集

平家物語

と

新古今和歌集巻第三

夏尋

題

朽流天宮御

新古今和歌集巻第三
夏尋
題
朽流天宮御
意付法師
更なること

平家物語巻第一

祇園精舎乃後の夢諸

り沙羅雙樹乃花のふ盛者必裏の

よりとけり者れりものそく

かす只春

そはかふと

ちりも同く遠く

塞綱泰の趙高

2025

5.21 Wed.

6.21 Sat.

● 主な展示品

〔Ⅰ〕新古今和歌集

伝源実朝筆『新古今和歌集』（存上巻）

伝後京極良経筆『新古今和歌集』

伝冷泉持為筆『新古今和歌集』断簡

伝寿暁筆『頭注密勘』断簡 他

〔Ⅱ〕平家物語

伝世尊寺行俊筆『平家物語』断簡（長門切）

萩明倫館旧蔵長門本『平家物語』巻一一

長門本『平家物語』（江戸中期）写

伝八条院（暲子）筆仮名書状 他

● 鶴見大学図書館1階エントランスホール ● 入場無料

● 月曜・金曜 8:50-21:00 ● 土曜 8:50-18:00 日曜・休館

鶴見大学図書館 [交通] JR鶴見駅より徒歩10分・京急鶴見駅より徒歩15分

HP <https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/library-official/> X https://twitter.com/tsurumiuniv_lib



第 163 回 鶴見大学図書館 貴重書展
令和 7 年度 中世文学会春季大会開催記念
新古今和歌集と平家物語

令和 7 年度中世文学会春季大会が鶴見大学にて開催されます(5 月 31 日～6 月 1 日)。初日のシンポジウムでは『新古今和歌集』のテキストデータ化をテーマにして討論が行われ、2 日目は『平家物語』に関する研究発表と『顕注密勘』についての発表が予定されています。

そこで今回の展示では、「新古今和歌集と平家物語」と題しまして、『新古今和歌集』の古写本(初披露の伝後京極良経筆本も出陳します)と本学が所蔵される伝寿暁筆『顕注密勘』断簡、そして長門切や萩明倫館旧蔵長門本等、『平家物語』の優品を揃えました。2 日間の熱のこもった討論、研究発表の間に、お楽しみいただけたらと思います。

2025 年 5 月 鶴見大学図書館

展示品リスト

〔Ⅰ〕新古今和歌集

- 1 『新古今和歌集』 存上巻 綴葉装 1 帖〔鎌倉時代中期〕写 伝源実朝筆
- 2 『新古今和歌集』 存巻 1～5 綴葉装 1 帖〔鎌倉時代後期〕写 伝後京極良経筆
- 3 『新古今和歌集』 綴葉装 1 帖〔鎌倉時代後期〕写 伊達家旧蔵
- 4 『新古今和歌集』 綴葉装 2 帖〔室町時代中期〕写
伝真乗院僧正・伝定法寺公助僧正筆 三条西公条外題及び加証奥書
- 5 『新古今和歌集』断簡 卷子装 2 軸 存巻 16 以下〔室町時代後期〕写 伝冷泉持為筆
- 6 『顕注密勘』断簡〔南北朝時代〕写 伝寿暁筆

参考 『古今和歌集』断簡〔南北朝時代〕写 伝寿暁筆

〔Ⅱ〕平家物語

- 7 『平家物語』断簡(長門切)〔南北朝時代〕写 伝世尊寺行俊筆
 - ア「三十騎には」 * 源平盛衰記巻 35・栗津合戦(樋口次郎降人)に該当
 - イ「名乗て懸出」 * アに同じ
 - ウ「倒す頭は水」 * 源平盛衰記巻 37・則綱討盛俊に該当 ※古筆手鑑所収
 - エ「りけれとも」 * 源平盛衰記巻 37・重衡卿生虜に該当 ※軸装
 - オ「刀には胸板」 * 源平盛衰記巻 37・平家公達亡入 道弟忠度 に該当
 - カ「けり又舞前」 * 源平盛衰記巻 42・玉虫立扇 与一射扇に該当
 - キ「ゑ仕候まし」 * 源平盛衰記巻 42・与一射扇に該当
- 8 『平家物語』長門本 袋綴 2 冊 存巻 1・2 萩明倫館旧蔵〔江戸時代中期〕写
- 9 『平家物語』長門本 袋綴 20 冊〔江戸時代中期〕写 笠栄治氏旧蔵
- 10 『平家物語』長門本 袋綴 18 冊 欠巻 5・20〔江戸時代中期〕写
- 11 仮名書状 1 軸(3 通)〔平安時代末期〕写 伝八条院(暲子)筆 高橋亨氏旧蔵

※展示スペースの都合上、9、10 は巻第 11 の 1 冊のみを展示しています。

〔1〕新古今和歌集

『新古今和歌集』は鎌倉初期に後鳥羽院が下命した8番目の勅撰和歌集で、『万葉集』や『古今和歌集』と並び、和歌史に重要な位置を占めている。しかし、その成立過程は複雑である。まず、藤原定家ら5人の撰者による撰歌が行われた。それぞれの歌に撰者名注記が付されている伝本もあり、誰がどの歌を撰んだのか分かる。次に後鳥羽院自身が3度にわたって精撰し、それを部類して、元久2年(1205)の竟宴で一応の完成を見る。しかし、実際にはその後も「切継ぎ」と呼ばれる歌の差替えが承元3～4年(1209～10)ころまで続けられた。現存する伝本は切継ぎ時代のものがほとんどで、伝本によって歌の出入りや配列の相違などがある。

さらに、後鳥羽院は承久の変で隠岐に配流された後にも、『新古今集』をさらに精撰し、380首ほどを除棄した。これを隠岐本という。切継ぎ時代の伝本であっても、隠岐本に残された歌ないし除かれた歌に合点などの記号を付すものがある。ただし、撰者名注記も隠岐本合点も伝本によって異同があり、問題をさらに複雑にしている。

1 『新古今和歌集』 存上巻 綴葉装1帖 (鎌倉時代中期) 写 伝源実朝筆

真名序・仮名序に続き、巻1～10を書写。表紙なし。縦23.0cm×横15.5cm。内題、「新古今和調集序(～巻第九)」(巻十は内題の部分が欠)。見返し、前は欠、後は布目地金紙に銀泥で山を描き、銀切箔や野毛を散らす。料紙、斐紙。11括(うち6丁が欠脱)。1詞書～11作者、299詞書～305上句、535詞書～545詞書、829詞書～835歌、895歌～984作者、欠。毎半葉、真名序と仮名序は7行、本文は11行。和歌2行(上句末で改行。詞書は2字下げ)。字高、真名序と仮名序は約16.3cm、本文は約16.5cm。奥書なし。蔵書印なし。全体に朱の書入れ(作者の勘物・撰者名注記・隠岐本所載歌への合点)があるが、本文とは別筆であろう。二重箱入り。内箱は桐で、蓋に「鎌倉右大臣實朝真跡／新古今集／西邨(印)」と墨書。外箱は茶色漆箱。伝称筆者の源実朝(1192～1219)は頼朝男で、鎌倉幕府3代将軍。和歌を好み、家集に『金槐和歌集』がある。

当該資料は巻上のみの残欠本で欠脱も少なくないが、書写年代がかなり古いうえに、切出歌を持たず、撰者名注記と隠岐本所載歌への合点(所載歌へ合点をつける方が、除棄歌へ合点をつけるよりも古い形式といわれる)をもつ点で貴重である。また、「院御本」と比較し、歌の出入りを朱で注記する箇所もあるが、後藤重郎『新古今和歌集研究』(風間書房、2004年)所収「隠岐本符号一覧表」を参照すると、完全に所収歌が一致する伝本は見出せない。

登録番号:1410820

2 『新古今和歌集』 存巻1～5 綴葉装1帖 (鎌倉時代後期) 写 伝後京極良経筆

真名序、仮名序の後に巻1～5を書写。香色菱繫ぎ地に牡丹唐草などを織り出した緞子表紙。縦22.4cm×横15.2cm。見返し、雷文繫ぎ金紙。料紙、斐紙。毎半葉、真名序7行、仮名序8行、本文9行。和歌2行(上句末で改行)、詞書約2字下げ。字高、約20.7cm。奥書なし。蔵書印なし。14番歌下句～19番詞書、242番歌～247番作者、314番歌(別筆で補写した紙を挟む)、508番詞書～512番歌が脱落する。一方、1979(承元四年九月止之)、1980(被止了)、1981(被出了)、1982(被入雑上了)、1984(被出了)、1985(入金葉集之由雅経朝臣申之)、1986(入金葉集之由云々)番の切出歌をもち、それぞれ括弧内の注記が付される。異本歌は1首も含まない。最終丁に「永享七年(1435)九月廿九日／(1行空白)／(三字分の擦り消し痕)」と記されるが、本文別筆。

極札、1枚目、表「後京極摂政良経公〈新古今和調集序／春哥上／みよしのは 末なへてよの〉(琴／山)」、裏「四半本一冊 廿一〈戊／子〉十(了悦)」(縦14.5cm×横2.5cm)、2枚目、表「後京極殿良経公〈新古今和調集巻第一／半本一冊〉(守／村)」、裏「(了任)」(縦12.3cm×横1.9cm)。伝称筆者の藤原良経(1169～1206)は兼実男、慈円の甥で、新古今時代の主要歌人の1人。『新古今集』仮名序の作者で、その書風は後京極流と呼ばれる。

なお、昭和天皇が皇太子時代に宮城県を訪れた際、部屋の装飾として土井晩翠から借用された。当時の宮城県知事上田萬年による依頼状と礼状が附属。

登録番号:1447029

3 『新古今和歌集』 綴葉装1帖 〔鎌倉時代後期〕写 伊達家旧蔵

真名序欠。仮名序「しかのみならずたかき屋に」から1937番作者名まで存（ただし1オは紙面擦過により判読困難）。表紙なし。縦25.8cm×横18.3cm。内題「新古今和歌集巻第一（～二十）」。

料紙、楮紙。12括（うち4丁欠）。毎半葉、仮名序12行、本文12行（ただし、終わりの2括は13～16行）。和歌1行（詞書2字下げ）。字高、仮名序約21.8cm、本文約22.0cm。奥書なし。蔵書印なし。黒の漆箱入（箱書なし。本よりもかなり大きく、転用された箱か）。付属の包紙に「仙台侯旧蔵本」、「鎌倉時代鈔本也」。

残存状況は以下のとおり。691詞書～701詞書、824詞書～831歌、950歌～969歌、1118詞書～1139作者、1283詞書～1293作者、1670歌～1738作者、1937歌～1978歌、欠（落丁などの物理的要因による）。816詞書の途中から目移りで817詞書となり816歌、欠。204・935・1026は詞書・作者・歌、欠。387・386、602・601、755・754の順。445・446は歌順と詞書と作者に問題あり、456・455・457、513・512の順で作者に問題あり。1930詞書中の「ちる花に」の歌を改行して、独立した歌として書く。また、1569の次に「題不知 能因法師」として「かくしつゝふけゆく秋も老ぬればしかすがにこそかなしかりけれ」とあるのは548の重出。

とくに注意されるのは、切出歌の1979・1980・1984・1986・1988・1989・1990・1991・1992・1993・1994、異本歌の1999（紅梅文庫旧蔵八代集本に所収）・2001（同上）が含まれていることであろう。他本によると、1979には「承元四年九月止之」、1986には「入金葉集之由云云」、1991には「入拾遺集之由、権中納言源朝臣申之」と注記されている場合がある。そのため、1979を持つ当該資料は承元4年（1210）9月以前の姿を留めていると見られる。また、勅撰集は同一の歌を重複して採らないのが原則であるため、『金葉集』（三奏本・秋・220・恵慶）に入集した1986番歌や、『拾遺集』（雑賀・1169・貫之）と『金葉集』（初度本・賀・458）に入集した1991番歌が含まれているのは未精撰の状態を窺わせる（ただし、それぞれ『金葉集』二度本や『拾遺抄』には入っていない）。

掲出したのは2001番の異本歌「祐子内親王家の物語に、玉藻にあそぶと云物語を出しつるに／後朱雀院中宮宣旨／あり明の月まつほどにあるやとてうはの空にも出にけるかな」。

登録番号：1420269

4 『新古今和歌集』 綴葉装2帖 〔室町時代中期〕写

伝真乗院僧正・伝定法寺公助僧正筆 三条西公条外題及び加証奥書

真名序・仮名序・本文の順に書写。深緑色牡丹唐草文様金欄表紙。縦25.5cm×横17.2cm。表紙左肩の竜紋朱題簽（縦14.4cm×横3.0cm）に「新古今和歌集上（下）」と墨書（三条西公条筆）。見返し、金銀切箔・野毛・砂子散らし。料紙、斐紙。毎半葉、真名序・仮名序は9行、本文10行。和歌1行。詞書約2字下げ。字高、真名序・仮名序は約21.7cm、本文は約22.0cm。上下帖ともに8括り。上帖末に「右仁和寺真乗院僧正筆也／一覽之次記之／永禄三年仲秋下澣／称名野积（花押）」、下帖末に「此集上卷真乗院僧正至下卷者／定法寺公助僧正連枝之相並蓋似／二王二陸者乎／一見之次聊誌之／于時永禄庚申仲秋下旬／称名野积（花押）」と本文別筆で墨書。永禄3年（1560）、三条西公条（1487～1563）による加証奥書。「仁和寺真乗院僧正」は三条実量（1415～1484）男の宗一（覚遍。？～1519）、「定法寺公助僧正」（生没年未詳。1533年生存）はその兄。公条は2人を「二王」（書に秀でた王羲之・王献之の父子）、「二陸」（文人として名高い陸機と陸雲の兄弟）になぞらえる。蔵書印なし。

折紙、「新古今和歌集〈全〉／上 真乗院僧正／下 定法寺僧正／御両筆無疑者也／〈正徳三巳曆〉季秋上旬 〈古筆〉了仲（朱印）／外題奥書西三条公条公芳毫」。

1979の切出歌「中納言家持／ふる郷に花はちりつゝみよしのゝ山のさくらはまださかずけり」（掲出箇所）をもち、754・755番歌が逆順で詞書に誤りを含む。

登録番号：1404553-1404554

5 『新古今和歌集』 断簡 卷子装2軸 存巻16以下 〔室町時代後期〕写 伝冷泉持為筆

綴葉装を改装した卷子装（もとの1面は縦24.3cm×横約16.2cm）。後補薄金茶色牡丹唐草文様緞子表紙。縦24.3cm×横20.4cm。見返し、金布目紙。料紙、斐紙。総裏打ちを施し、銀切箔をまく。毎半葉12

行、和歌1行、詞書約2字下げ。字高、約21.7cm。第1軸は雑上の1459詞書途中から雑中の巻軸までを収め、1463番（誤脱か）、1553～1561番（落丁か）欠。また、1528・1529が逆順。第2軸は雑下の巻頭から神祇の巻軸までを収め、1846番歌の後に1856～1863、1847～1855、1864と続く錯簡がある。また、1909詞書の途中から1910詞書が誤写され、1909番歌を欠く。

極札、1枚目、表「下冷泉祖持為卿〈新古今集之内／おる人の／あし引の両巻〉（琴／山）」、裏「四半本継二巻〈癸／酉〉十（了意）」（縦14.2cm×横2.2cm）。2枚目、表「下冷泉殿持為卿〈新古今集之内／おる人の／あし引の〉（汲水）」、裏「四半本継二巻〈癸／巳〉夏（好齋）」（縦16.0cm×横2.4cm）。ほかに「大倉了恵鑑定書」1通が附属。伝称筆者の下冷泉持為（1401～54）は冷泉為尹男で下冷泉家の祖となった。

掲出したのは1991番の切出歌「題しらず 貫之／いく代へしいそべの松ぞむかしより立よるなみの かずはしるらん」。他の伝本の注記によると、『拾遺集』に入っているため切り出されたという。実際、『拾遺集』（雑賀・1169）に入集。 登録番号：282412-282413

6 『頭注密勘』断簡（南北朝時代）写 伝寿暁筆 折帖1帖（11葉貼付）

伝称筆者を寿暁とする『頭注密勘』の断簡（『頭注密勘』は顕昭の『古今秘注抄』〔頭注〕に定家が自説〔密勘〕を加えた『古今和歌集』の注釈書）。本学図書館には展示中の11葉に加えて「古筆手鑑」（登録番号：1327011）に押された1葉（17.0cm×13.1cm、巻1・春上・47・50・51番歌）が伝わる。

伝称筆者寿暁の生没年・伝は未詳。『新後撰集』初出の勅撰集歌人。『津守和歌集』に6首入集することから、津守家の一族と推測されている。舟見一哉氏は、宮内庁書陵部蔵「古筆手鑑」所収の「伝津守寿暁 歌合切」が同筆であるとした上で、同歌合が正和元年（1312）頃に催行された津守一族の歌合を「津守寿暁」が書写することは自然であり、寿暁を伝称筆者とする一連の断簡群を、寿暁その人の真筆とみてよいのではないかと推測する。

本断簡はもと綴葉装。料紙、斐紙。1葉約17・0cm×13・5cm。毎半葉11行。字高、約14.0cm。1首2行書。頭注は約1字下げ、密勘は約2字下げに記す。11葉の内訳は以下のとおり。

- | | | | |
|----------------|----------|----------|-------|
| ①巻1・春上・51・55番歌 | ②56・58番歌 | ③58・59番歌 | ④61番歌 |
| ⑤巻2・春下・巻頭69番歌 | ⑥72・73番歌 | ⑦73番歌 | ⑧77番歌 |
| ⑨77番歌（⑧と本文連続） | ⑩111番歌 | ⑪126番歌 | |

従来報告されている本断簡のツレは12葉。海野圭介氏が5葉を調査された段階では「特徴的な異文などは認められず、概ね通行本本文に一致する」ということであつたが、本学図書館所蔵断簡中には注目すべき本文異同が散見する。中でも、⑧⑨断簡（77番歌注に該当）は『頭注密勘』の分類の指標となる箇所であるが、頭注に「又秋風松ヲ払テソキニオツ、童部ナドノ 塙ノソヒニ雀ノキタルナド申詞トカヤ、松ノミナドノヲツルニヤ」とあって、中央大学図書館蔵本の「此注、萩原殿御本にはかしらがきにす」という注記と符号する。おのずと本断簡と「萩原殿御本」との近似性が推測されるが、このあたりのことについては、5月31日・6月1日に本学で開催される中世文学会における新田奈穂子氏の研究発表「伝寿暁筆『頭注密勘』断簡の再検討―七七番歌注を中心に―」に期待したい。 登録番号：282412-2824123

【主な参考文献】

- ・海野圭介『頭注密勘伝本考』（『古代中世文学研究論集 第1集』所収・平成8年・和泉書院）
- ・同『頭注密勘』古筆資料の検討』（『古代中世文学研究論集 第2集』所収・平成11年・和泉書院）
- ・川上新一郎「清輔本古今集考 補遺」（斯道文庫論集32・平成30年）
- ・舟身一哉「伝寿暁筆『古今集』断簡及び関連資料の諸問題」（実践国文学99・令和3年）

参考 『古今和歌集』断簡（南北朝時代）写 伝寿暁筆 台紙貼1葉

6の『頭注密勘』と同様に伝称筆者を寿暁とする『古今和歌集』の断簡（巻1・春上・15～18番歌）。もと綴葉装。料紙、斐紙。25・5cm×17・7cm。毎半葉8行。字高、約21.4cm。1首2行書。詞書は約1字

下げに記す。同筆の書入は清輔本の勘物。当該断簡を含め、伝寿暁筆『古今集』断簡は現在 41 葉が確認されているが、舟見一哉氏によれば、清輔本の勘物のある断簡（但し、巻 11 以降の断簡には勘物はない）とあるべき箇所に勘物をもたない断簡が混在し、したがって同筆で書写された 2 種類の『古今集』の存在が推測されるという。当該断簡の書入は以下の通り。

此歌、五文字、伊勢語には、むさしのは、語云、むかしおとこ有けり、人のむすめをぬすみて、むさしへのゆくほどに、ぬす人なりければ、くにかみにからめられにけり、女をは草むらのなかにをきてにげにけり、みちくる人、このゝはぬす人あなりとて火つけんとす、おうなわびて、むさしのはとよおみけるをきゝて、女はとりてともにゐていきけり、

『伊勢物語』第 12 段を引くが、これは清輔本のうち保元二年本『古今集』と同様の勘物である。

なお、本文は定家本系統。また「内閣文庫本古今和歌集注」の注文と一致する書入（本文、清輔本勘物と別筆）を有する断簡もあるが、清輔本の勘物がある断簡には同注の書入は見られないという（舟見氏）

登録番号：1283300

《主な参考文献》

- ・川上新一郎「清輔本古今集考 補遺」（斯道文庫論集 32・平成 30 年）
- ・舟見一哉「伝寿暁筆『古今集』断簡及び関連資料の諸問題」（実践国文学 99・令和 3 年）

〔Ⅱ〕平家物語

7 『平家物語』断簡（長門切）〔鎌倉時代末期〕写 伝世尊寺行俊筆

『平家物語』には、断簡も多く存在する。その一つが、名物切として名高い「長門切」（平家切とも）である。長門切は現在、88 葉（含模写 4 葉）の存在が確認できる。当館はそのうち 19 葉を蔵している。

長門切はもと卷子本で、伝称筆者は「世尊寺行俊」（生年未詳～1407）とされてきた。しかし、行俊よりも古く、おそらくは鎌倉末期頃の書写であろうと推定されている。炭素 14 年代測定の結果、料紙は 1284 年前後 10 年程度のものであることが確認された。料紙の測定年代と染筆した時期とについては一定の幅を見る余地を残しておくべきであろう。例えば、藤原定家は嘉禎元年（1235）に独撰した『新勅撰集』の清書を世尊寺行能に託したが、その時の料紙は、文治 4 年（1188）に父俊成が『千載集』を撰集した折のものを用いたらしく、料紙と染筆との間には、少なくとも 50 年程度の懸隔があることになる。そういった幅を考慮するにしても、「『兵範記』紙背文書」（延応 2 年〈1240〉）や「『普賢延命鈔』紙背文書」（正元元年〈1259〉9 月以前）等に残された『平家物語』の早い存在の微証から、100 年以内の伝本であるということになろう。だとすると、現存する『平家物語』の中では最古の写本の一つと言っても過言ではない。

本文は、大半が源平盛衰記（以下盛衰記）に、一部は延慶本や長門本に共通し、まま独自異文を持つ。盛衰記の中でも、概ね蓬左文庫本、慶長古活字版に一致すると見られている。

世尊寺流に属する三手の能筆による寄合書きで、絵巻の詞書ではない、例外的な大型卷子本であったと見られるが、ミセケチや墨減の様相から、原本ではなく転写本であるとの指摘もある。

長門切に付された極札の中では、古筆本家二代了栄（1607～78）や古筆別家二代了任（1629～74）のものが古いので、卷子本の切断は了栄や了任らの頃に始まったと考えられる。池田光政（1609～82）は、「行俊」の筆と認識しつつ、長門切を模写している。

残存状況には巻の偏りがあり、盛衰記の巻で言うと、巻十五（宇治合戦記事）、十八（文覚記事）、二十六（祇園女御記事等）、二十七（墨俣川合戦、横田河原合戦記事等）、三十七（一谷合戦記事）、四十一（頼朝奏聞、逆櫓記事等）、四十二（屋島合戦記事等）が多く確認されている。このうち、巻二十七と四十二は特に多く、前者は 17 葉、後者は 14 葉に及んでいる。一方で、巻 1～6（便宜に算用数字を用いる）、8～10、12～14、20～25、28～34、36、39～40、44～48 相当部分は未だ発見されていない。この中には、鹿谷陰謀、頼朝拳兵、俱利伽羅合戦、平家都落ち、法住寺合戦、維盛入水、六代捕縛・処刑、建

礼門院出家・死去記事等が含まれる。

鎌倉末頃に、複数の世尊寺流の能書を集めて、盛衰記相当の分量をもつ読み本系『平家物語』の大型卷子本が製作された事実が意味するところは、極めて大きいと言えよう。

ア 「三十騎には」

5行。縦 29.0cm×横 10.5cm。料紙、楮打紙。界高、26.8cm。嘉右衛門による極札あり。

盛衰記卷三十五「栗津合戦（樋口次郎降人）」に相当する部分。「三十騎には不過けり造道四塚東寺の門へそ／あゆませける樋口次郎京へ入ると聞へければ／九郎義経の（※1）郎等とも我先にと七条（※2）を西へ／朱雀大宮を下りに東寺四塚へ馳向て合戦を／遂んとす樋口か甥に信濃武者千野大郎光弘と」（※1「の」の右傍に「か」。※2「条」の左傍に朱の「々」）。

『平家物語』諸本では、木曾義仲の討死と今井四郎兼平の自害の後、兼平の兄樋口次郎兼光とその甥千野太郎光弘らの動向が語られる。光弘は、諏訪神社上社神官の一族で、千野郷（長野県茅野市宮川）が名字の地。「千野」は「茅野」、「光弘」は「光広」とも書く。この長門切本文は、兼光の入京とそれを聞いた義経郎等の動き、光弘の名を記す場面である。イ「名乗て懸出」はこの数行後に位置する。いずれも、本文はおおむね盛衰記に近い。

盛衰記に拠れば、入京時三十騎以下に減っていた兼光の軍勢が、都の造道、四塚、東寺の門へ馬を歩ませ行くと、兼光入京の噂を聞いた九郎義経の郎等どもが七条大路を西へ、朱雀大宮を下り、造道へ馳せ向かう。兼光の甥千野太郎光弘は、義仲に加勢するため東山道からただ一騎で上京するが、すでに義仲は討たれていたのだった。光弘は兼光が入京すると聞き、急ぎ四塚辺りへ馳せ向かい、兼光の軍勢に加わって散々に戦った。

本断簡で三十騎に満たないというのは、盛衰記同様、兼光の軍勢を指すのであろう。その軍勢が造道、四塚、東寺の門へと馬を進めるのは、盛衰記に同じ。兼光の入京を知った義経の郎等が七条を西へ、朱雀大宮を下るのも盛衰記と同様だが、向かう先は、本断簡は「東寺四塚」、盛衰記は「つくり道」（以下、盛衰記の引用は、基本的に蓬左文庫本に拠る）である。彼らの様子を本断簡は「我先に」とするが、盛衰記にこの文言はない。延慶本・長門本・四部合戦状本（以下四部本）には「我^モ／＼（踊り字）」（延）とあり、彼らの積極的な様子はやや長門切本文に近い。本断簡は光弘を「信濃武者」とするが、盛衰記は「信濃国住人」とする。

盛衰記はこの後、光弘が東山道からただ一騎で京に上ったものの義仲が討たれたと聞いて兼光軍に加わった、とするが、延慶本・長門本では、光弘ははじめから兼光の軍中にいたように記す。盛衰記を無理のある設定とする向きもあるが、光弘の義仲への忠心を表そうとしているとも読めようか。

【参考文献】

- ・藤井隆「平家物語古本「平家切」について」（『文学・語学』21、1961年9月）。
- ・松尾葦江『軍記物語論究』（若草書房、1996年6月）第4章「読み本系平家物語の成立と表現」、「長門切」問題—平家物語成立論の更新」（『リポート笠間』59、2015年11月）、「長門切からわかること—平家物語成立論・諸本論の新展開—」（『國學院雑誌』118—5、2017年5月）、「源平盛衰記の伝本を見直す」（『国語と国文学』98—6、2021年6月）。
- ・池田和臣・小田寛貴「続 古筆切の年代測定—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」（『中央大学文学部紀要 言語・文学・文化』105、2010年3月）。
- ・佐々木孝浩『日本古典書誌学論』（笠間書院、2016年6月）第四編「平家物語と書誌学」の第二章「卷子装の平家物語—「長門切」についての書誌学的考察—」（初出は2013年2月）。
- ・平藤幸「新出『平家物語』長門切—紹介と考察」（鶴見大学日本文学会編『国文学叢録—論考と資料』〈笠間書院、2014年3月〉）、「新出『平家物語』長門切の紹介と考察」（『国文鶴見』58、2024年3月）、「『平家物語』長門切—鶴見大学図書館蔵断簡を中心に 付長門切一覧」（『書物学』25、2024年3月）。

イ「名乗て懸出」

6行。縦29.3cm×横12.6cm。料紙、楮打紙。朝倉茂入（初代）・神田家四代目道伴（1678～1749）による極札あり。道伴の札裏に「庚子 八」とあるので、享保5年（1720）8月の鑑定とわかる。

掲出したのは、盛衰記巻三十五「栗津合戦（樋口次郎降人）」に相当する。ア「三十騎には」の数行後の部分。「名乗て懸出たり千野太郎か申けるは何の十／郎にてもあれ敵をは嫌ふましとてまちかき／程に責寄て太刀を抜て戦ひければ千野太郎／か手に懸て原十郎被誅にけり同国上宮の千野／七郎光重も兄弟鼻を並て戦けるか敵四／人切殺して我身も打死してそ失にける小」。

ア「三十騎には」の後、盛衰記では、樋口次郎兼光軍に加わった千野太郎光弘が矢面に立って散々に戦っていると、筑前国住人原十郎高綱が登場する。本断簡はこれに続く場面である。「千野太郎（光弘）」が「何の十郎にてもあれ敵をは嫌ふまし」と言っていることから、名乗って駆け出たのは原十郎高綱であろう。高綱が「千野太郎」の手にかかり、原十郎が討たれるという文脈は盛衰記と同様である。

続く長門切本文の「同国上宮の千野七郎光重も兄弟鼻を並て戦けるか敵四人切殺して我身も打死してそ失にける」は盛衰記と一部異なり、注目すべき本文である。「千野七郎光重」は、この文脈では「千野太郎（光弘）」の弟と読めよう。おそらくは樋口軍にいる光弘・光重の兄弟が共に戦っており、弟光重が敵四人を切り殺して討死した、と読んでよいだろう。しかし盛衰記には、「同国上宮の千野大夫光家その弟に千野七郎光重も兄弟はなをならへてたゝかひけるかてき四人きりころしてわか身もうちしにしてそうせにける」とあるため、敵4人を斬り殺した「わか身」は、光重だけなのか、光家・光重兄弟の両者なのかかわかりづらい。「光家」は延慶本・長門本・四部本・源平闘諍録・寛一本では光弘（広）の父の名であり、『千野姓古系図』も同様である。盛衰記がここで「光家」を「兄」として登場させることには、何らかの錯誤や混乱があるのだろうか。

また、盛衰記は、光弘が、どのように最期を迎えたのかを明確に描いてはいない。光重（光家も含むか）等と共に討死したのか、別所で死んだのか、よくわからない書き方である。光弘の最期を記さないのは長門切本文も同じで、「敵四人切殺して我身も打死してそ失にける」の主語は光重であろうし、その後の「小」は、おそらく盛衰記同様「小玉党」の「小」で、児玉党による樋口の助命に話題が移ることを示唆しているのであろうから、この後の未発見本文にも光弘の最期は記されないであろう。他本では、光弘の最期の言葉と死にざまが詳しく描かれ、それに対し、例えば中院本では「かたき、御かた、ほめぬものこそなかりけれ」、百二十句本では「これを見て、惜しまぬ人こそなかりけれ」と評されるのに比べると、最期を描かない長門切本文や、不明瞭な盛衰記の記述は素っ気なく感じられる。その限りでは、長門切本文や盛衰記の方が、より原初の形であるのかもしれない。

ウ「倒す頭は水」

手鑑所収。5行。縦30.0cm×横11.0cm。料紙、楮打紙。界高、27.0cm。神田家四代目道伴（1678～1749）による極札あり。

掲出したのは、盛衰記巻三十七「則綱討盛俊」に相当する部分。「倒す頭は水の底に足は空に成てをきん／＼（踊り字）／としけるを則綱上にのらへて起しも不立／刀をぬきて菅も拳も通れと指すまゝ／にやかて頸をそかきたりける水もたまら／す落ちにけり太刀のさきに貫て高く指上て」。

一の谷合戦の「越中前司最期」の場面である。盛衰記では、越中前司盛俊に組み敷かれて頸を切られそうになった猪俣小平六則綱が言葉巧みに盛俊を騙し、盛俊に助けられ、二人で田の畔に腰掛けて語り合う。そこに塩谷五郎維広が近づいてきたので、則綱は、維広を待って盛俊を討ったならば二人で討ったと言われて不本意だし、維広に盛俊の頸を取られるのは悔しいから、自分が殺して後世を弔おうと思う。そこで、自分がいるから安心しろと言って盛俊を油断させ、両手で後ろの深田に突き倒す。頭は水の底に、足は岸の端にという体勢になった盛俊は起き上がろうとするが、則綱は盛俊の上に乗れ、頸を切る。太刀の先に頸を貫いて高く捧げて馬に乗り、大声で、鬼神盛俊の頸を取ったことを叫ぶ。盛衰記は則綱のこの振る舞いを「誠にゆゆしくぞ聞こえける」と評価する。

掲出した長門切本文は、おおむね盛衰記に近く、一部延慶本・長門本に近い。突き倒された盛俊の様子を「をきん／＼としけるを」とするのは盛衰記・延慶本・長門本に共通する。「則綱上にのらへて」と「太刀のさきに貫て高く指上て」は盛衰記と同じだが、「起しも不立」と「菅も拳も通れと指すまゝにやかて頸をそかきたりける」は盛衰記になく、延慶本・長門本に近い。「菅」(つか)は、刀の柄(つか)のことで、刀の柄やそれを握る拳までも突き通そうという、軍記や説話の合戦場面にまま見られる、激しい殺意を表す時の表現である。「足は空に成て」は独自の表現。「水もたまらず(ず)落ちにけり」も、(ここでは)独自の表現。切れ味よく見事に頸を切り落とすさまを言う。なお、本断簡に後接する断簡(個人蔵)は則綱の振る舞いを「実にゆゝしくそ(ぞ)聞へ(べ)し」と評価しており、この点は盛衰記に共通する。近づいてくる人物を、盛衰記は「塩谷五郎維広」、他本は「人見四郎」とするが、掲出部分と後接の長門切本文からは、誰なのかはわからない(盛衰記は、人見四郎は本場面より前に、生田で討死したとする〈巻三十七「平次景高入城」〉)。塩谷とするか人見とするかあるいは他とするかで、より長門切本文の特質を窺うことができよう。関連する部分の断簡の出現が期待されるところである。

【参考文献】

・平藤幸「平家切から分かること―新出断簡紹介を通して 付 長門切一覧―」(松尾葦江編『軍記物語講座 第二巻 無常の鐘声 平家物語』〈花鳥社、2020年7月〉)。

エ「りけれとも」

掲出したのは、盛衰記巻三十七「重衡卿生虜」に相当する部分。「りけれともそもいくはすくなく死は多か／りけり重衡卿も今は叶はしとおほしければ／浜路に懸て渚に打副西を指てそ落給ふ／梶原平三景時と云者かよき大將軍と見て」。

盛衰記は、一谷合戦の際、東の城戸口であった生田社を三千余騎で固めていた重衡軍が皆落ちてしまったとし、次のように続ける。「うみに入り山にこもりけれともいくはすくなくしするはおゝしてきはうんかのことしみかたはせいなかりければ重衡卿今はかなはしとてはまちにかゝり渚にうちそひて西をさしておち給」。

ここまでは本断簡と同様だが、この後盛衰記は、「其日のしやうそくは」として、重衡の装束と馬に関わり、次のように詳しく描写する。「褐衣にしらいとをもちて村千とりをぬいたるひたゝれにむらさきすそこのよろひをそき給へる馬はどうじかげとてくつきやうのいちもつはやしり也大臣殿の御馬をあつかり給てそ乗給へる」。重衡の装束描写は延慶本・長門本・四部本・覚一本もほぼ同様、馬が童子鹿毛であったことも諸本同様。この馬が大臣殿(宗盛)から預った馬であったことは、延慶本・長門本・四部本・南都本も同じ。追手が重衡を「よき大將軍」と判断したのは、装束や馬に拠るのであり、その描写は物語の進行上に欠かせない。それが本断簡のこの後の部分にある可能性は高いが、確言はできない。

本断簡では、重衡を「よき大將軍と見」たのは「梶原平三景時」とするが、盛衰記は、「庄三郎家長かよき大將軍と見てふしのりかへのわらは三きにてをふてかゝる」と記す(ただし巻三十九では庄四郎が重衡を捕らえたとする)。重衡を捕らえたのを梶原平三景時とするのは、延慶本・長門本・四部本・源平闘諍録。南都本は「梶原父子三騎」。覚一本は「梶原平三景季・庄四郎高家」が追いかけ、景季が馬を射て高家が捕らえる。『吾妻鏡』寿永三年二月七日条では、重衡は「景時・家国等」に生け捕られたとする。家国は、続群本『武蔵七党系図』に拠れば庄四郎高家男。盛衰記の「家長」は、同系図に拠れば高家の兄弘高の男。この断簡の本文では、この後、梶原平三景時が単独で重衡を捕らえるのか、「父子」などとして複数で捕らえるのか、はたまた違う人物が登場するのか。それを知るには、その断簡の出現を待つほかはない。

【参考文献】

・早川厚一・佐伯真一・生形貴重校注『四部合戦状本平家物語全釈 巻九』(和泉書院、2006年9月)。
・松尾葦江「平家物語断簡「長門切」続々考」(松尾・吉田永弘編『平成二十一年度 國學院大學文学部共同研究報告』〈2010年3月〉)。
・延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 巻九(第五本)』(汲古書院、2015年10月)。

オ「刀には胸板」

掲出したのは、盛衰記巻三十七「平家公達亡 入道弟忠度」に相当する部分。「刀には胸板を突き走らかしおとかひ／下片頬くわへにつと突貫く已に限と／へけるに忠隆か郎等落重て薩摩守を／しと切るこてを以て合給たりければこて／わへに妻手のうてを打落さる今は叶／しとおほしければそこのけ念仏申て死／んとて六弥太を持ちおこし片手にて／給へは一段はかりそなけたる西にむかひ／の上帯切鎧ぬきすて念仏高声に／給ふ忠澄太刀をぬき寄ければ忠度今は」。

天が少し裁たれていて、各行頭の文字を欠く。本文は盛衰記に極めて近いから、盛衰記を参考にして二行目以下の行頭の字を補うとすれば、以下になるだろうか。「おとかひ／の下」、「と／見へけるに」、「薩摩守を／みしと切る」、「こて／くわへに」、「今は叶／はしと」、「死／なんとて」、「片手にて／提給へは」、「西にむかひ／鎧の上帯切」(直後に「鎧ぬきすて」が続くので「鎧」以外の一字の可能性もある。盛衰記は「ものゝくぬきすて」)。「高声に／唱給ふ」。

一谷合戦後、西に向かっていた薩摩守忠度が、武蔵国住人岡部六弥太忠澄に声をかけられて組む場面である。盛衰記では、忠度が前もって抜いていた刀で、忠澄を三刀突く。「一二の刀はよろひのうへをつき給へは手もおはす」という状態であったが、「三のかたなにむないたをつきはしらかしおとかひのしたかたほうくはへにつとつきつらぬく(慶長古活字版「三ノ刀ニ胸板ヲ突ハシラカシ領ノ下片頬加ヘニツト突貫」(三度目の刀で〈忠澄が身につけている〉胸板を突き刺し、〈刀の切っ先をそのまま〉走らせ、顎の下・片頬までもつと刺し貫いた)」とする。盛衰記と同じであれば、本断簡の直前には「三の」とあるはずである。忠度が忠澄を突いた最初の二回は鎧に防がれ、三回目で傷を負わせたとするのは諸本同様。三回目を諸本は以下のように描く。延慶本「甲ノ内ヘツキ入タリケレハホウヲツキツラヌキテ六矢太^ア後ヘ刀三寸計^ツ出タリケル」。四部本「被^ケ樋^ヒ喉笛縫^ヒ様」(喉笛のあたりを、まるで縫ったように貫かれ〈「縫ひ様」は、刀が一部見え、一部隠れた状態〉)。南都本「忠澄カ口ヨリ小耳ノ根ヘ指トヲサレタリケリ」。覚一本「うち甲へつき入られたれ共、うす手なればしなざりけるを」、などとする。覚一本以外はいずれも生々しい描写であり、この話が、忠度の風流を伝えるものとなる前は、これだけの重傷を負った上に投げ飛ばされた岡部忠澄がそれでも忠度を討った、という武功談であった可能性もあろうか。

「忠隆か郎等」の「忠隆」は「忠澄」の誤りであろう。以下を盛衰記は次のように記す。「たゝすみすてにと見えけるにらうとうおちあひてさつまの守をみしときるこてをもつてあはせたりければめてのうてをこてくはへにうちおとさる忠度いまはかなはしと覚しめしければうへなる六弥太をもちおこしてかた手にさけこゝのけねんふつ申てしなんとてなけのけ給へはゆたけ二たけはかりなけられて忠澄とゝはしりてあんとせすそのまにたゝのりはよろひのうはおひきりものゝくぬきすてゝたんさして西にむかひねんふつかうしやうにとなへ給ふそのゝちたゝすみたちをぬきよりければいまは(なんちか手にかゝりてうたれん事しさいなし)」とする。

「みしときる」は力いっぱい切ること。忠度は籠手をつけた右腕で防ごうとしたため、籠手ごと右腕を切り落とされた。延慶本と長門本は左腕を切り落とされたとする。六弥太(忠澄)を片手で引っ提げて投げ飛ばした。投げ飛ばした距離を、本断簡は「一段」(ここでは6間、約11mであろう)とし、盛衰記は「ゆたけ(弓長)二たけ(長)」とする。「弓長」は弓ひと張りの長さで、通常7尺5寸(約2.3m)。その二倍なので、約4.6m。延慶本・長門本は「三イロ」(延)なので、三尋つまり約4～5m。覚一本は「弓だけばかり」約2.3m。盛衰記の「忠澄とゝはしりてあんとせすそのまにたゝのりは」や「たんさして」は、本断簡にはない。

【参考文献】

- ・松尾葦江『軍記物語論究』(若草書房、1996年6月)第4章「読み本系平家物語の成立と表現」。
- ・早川厚一・佐伯真一・生形貴重校注『四都合戦状本平家物語全釈 巻九』(和泉書院、2006年9月)。
- ・延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 巻九(第五本)』(汲古書院、2015年10月)。

カ「けり又舞前」

7行。縦30.6cm×横14.8cm。料紙、楮打紙。古筆了仲・古筆了珉(1645～1701)による極札あ

り。了珉の札裏に「戊寅 極」と見えるので、元禄11年(1698)の鑑定とわかる。

掲出したのは、盛衰記巻四十二「玉虫立扇 与一射扇」に相当する部分。「けり又舞前とも云者也桃李の粧うつ／くしく芙蓉の兒こまやかなりければ／西国にても被召具たりけるを被出て此／扇をも立たりけり平家方に又被儀ける／は九郎は傾城にめつる者にてあんなれば／ちかつく事もあらむす便宜よくは射て／とれとて弓の上手を一人のせられけり其射」。

盛衰記本文は以下のとおり。「(玉虫のまへとも) いふ又はまひの前とも申すことし十九にそ成ける雲のみつら露のまゆ花のかほはせ雪のはたへゑにかくとも筆にも及かたしおりふし夕日にかゝやきていとゝ色にそまさりけるかゝりければ西国までもめしくせられたりけるを出されて此あふきをあてたり(慶長古活字版「立タリ」)(以下、扇の由来と、このいくさの勝敗を占う目的で扇を立てたことが記されるが、省略する)義経は女にめつる者と平家にいふなるかかくかまへたらは定てすゝみ出て興にいらん所をよきいて用意して真中さしあてゝいおとさんとたはかることゝ心えたりあの扇いられなんやとの給へは」。

那須与一の射扇記事を載せる長門切は、本断簡とキ「ゑ仕候まし」を含めて、現在、7葉が確認されている。盛衰記は女性の名を「玉虫のまへ」「又はまひの前」と記すので、本断簡冒頭の「けり」の前には、「玉虫の前」かあるいは別名が記されているのであろう。長門本は、この女性がもと建礼門院の雑仕で、その時は「玉むし」と呼ばれ、「当時は平大納言時忠の卿の中愛の前とそ申ける」と記す。盛衰記は建礼門院立后時に千人の中から選び出された雑仕だとする。本断簡の数行後に位置すると思われる長門切(「源氏誤と見」)にも建礼門院に関連する女性であることを窺わせる記述があるが、詳細は不明。その断簡では、女性の年齢を「十七八計」とする(中院本も「十七八に見え」〈四部本も同〉)。長門本は、「十八九ばかり」とした後、最後に「十九年の春秋」と断定。寛一本も「十八九ばかり」(松雲本は「十八九二成ケル」と断定)、盛衰記は「十九」と断定。延慶本は「廿計」。

この女性が美女であったことを記すのは諸本同様だが、その美しさを具体的に記すのは本断簡と盛衰記のみ。しかし「桃李の粧うつくしく芙蓉の兒こまやかなり」という形容は盛衰記とも異なり、独自である。また、美しいがゆえに平家が西国まで連れていた、とするのは本断簡と盛衰記のみ。義経は美女を好む者らしいので、義経が近づいたら討ち取れというのが平家方の策略であった、と明記するのは長門本も同じだが、本断簡が「弓の上手を一人のせられけり」とするのに対して、長門本では、能登守教経や上総守景清などの弓の名手十余人が女性と同船していたとする。盛衰記は、扇を立てたことは平家がいくさの勝敗を占う目的であったと記し、義経が平家の策略を「心えたり」とした上で、「あの扇いられなんや」と畠山重忠に命じる展開となる。松雲本も、平家方の策略であることを義経自身が「最前二心得タリ」とし、「誰カ射テ見ン」と言う。南都本・屋代本・寛一本・中院本は、後藤兵衛実基が平家の策略を見抜き、射手に那須与一を推薦する。延慶本と四部本は、平家の謀には触れずに、誰が扇を射るかの評定を始める。

【参考文献】

- ・松尾葦江『軍記物語論究』(若草書房、1996年6月)第4章「読み本系平家物語の成立と表現」。
- ・早川厚一・佐伯真一・生形貴重校注『四部合戦状平家物語全釈 巻十一』(和泉書院、2017年10月)。
- ・延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 巻十一(第六本)』(汲古書院、2018年3月)。

キ「ゑ仕候まし」

8行。縦30.2cm×横16.9cm。料紙、楮打紙。朝倉茂入(初代)による極札あり。

掲出したのは、盛衰記巻四十二「玉虫立扇 与一射扇」に相当する部分。「ゑ仕候ましいかにと申候に源平御合戦かゝる晴れの軍庭にして此程の仰せを蒙候事は弓矢取身の望も願ふ所の面目とは存候へともあの扇を若射損し候ぬる物ならば君の御為助宗か為世関へもいかゝ候へきされは御計もや候へかるむと申ければ道理なり／＼と皆人舌をそならしける判官殿もしはしは無音にておはしけるか只射給」。

カ「けり又舞前」と本断簡との間には、現在、3葉の長門切の存在が確認できているが(以下①②③とする)、①はカ「けり又舞前」に登場する女性の話が続き、②③と本断簡では、扇の射手が選ばれていることがわかる。以下、②③と本断簡を、私に清濁・句読・鉤括弧・ルビを施しつつ翻字する。

や見まいらせんとぞ招ける。判官此を聞給ひ、義盛を召して「此勢の中にあの扇射つべき器量の者やある」と御尋あり。船の中にはなりをしづめて是を見る。源氏の軍兵は、誰か仰せを蒙らんと、きもをきりかたづをのみてぞありける。判官、射手を被撰けり。彼は射てんや、其はゑかなは

(②仁和寺藏手鑑所収。影印は小松茂美『古筆学大成 二四』に掲載)

こそ候へ。加様の物はいまだ覚候はず」と申ければ、其後、畠山庄司次郎を召て「これを射よ」とぞの給ける。庄司次郎畏申けるは、「強弓勢兵遠矢などにて候は、仰かぶるべし。加様の物は思も不寄よらず」と申ければ、義盛御そばに候けるが、「真塩殿、あのあふぎあそばし候へや」承り候事の候物を一

(③現藏者不明。田中塊堂氏旧藏か。影印は『かな研究 三七』に掲載)

「ゑ仕候まじ。いかにと申候に、源平御合戦かゝる晴れの軍庭にして此程の仰せを蒙候事は、弓矢取身の望も願ふ所の面目とは存候へども、あの扇を若射損じ候ぬる物ならば、君の御為助宗が為、世閑せけんへもいかゞ候べき。されば御計もや候べかるむ」と申ければ、「道理なり／＼」と皆人舌をぞならしける。判官殿もしばしは無音にておはしけるが、「只射給

(本断簡)

これらをまとめると、以下のようになる。義経はまず義盛(伊勢三郎義盛か)に、源氏勢の中に射扇可能な者がいるかを尋ね、おそらくは何人かが断った後、その後畠山が命じられるも辞退し、義盛が真塩(鷲尾(三郎経久)か)に勧めるもようである。真塩も断ったのか、その後、「助宗」が、失敗し面目を失う恐れから辞退の言を述べる。この「助宗」は、盛衰記では与一の父の名だが、父・与一共に諸本間で名の異同が大きく、どちらを指すか不明。兄十郎の可能性もあるか。義経は再度「助宗」に命じたのか、他者に命じたのかは不明。

この場面は『平家物語』諸本間の異同が大きく、扇の射者が最終的に与一に決定するまでの経緯が多様であり、松尾葦江が「諸本が趣向を凝らし表現を洗練しようとした痕跡が窺える」と指摘するところでもある。長門切も、他の場面に比べ、盛衰記との一致度が小さい。

諸本の内容を、射手が那須与一に決定するまでの経緯が簡略なものから順に記せば、次のとおりである。

長門本―後藤兵衛実(真)基が与一を推薦し、与一は「おほせ」を即座に承る。義経が射扇を命じる言葉はない。諸本中もっともスムーズに受諾していると言ってよい。延慶本―藤兵衛実基が与(余)一を推薦し、義経が命じるとすぐに受諾。ただし「辞ルニ不及」とあり、与一は辞退をまったく考えないわけではなかったことを示唆するか。四部本―まず武蔵坊弁慶が和田(小)太郎(義盛)を推薦するが、金子十郎(家忠)が、与一の方が手が細やかだとして与一を推薦。義経が「与一に射させよ」と言うと、与一は特に承諾の言なく実行に移す。なお、和田小太郎義盛はこの後の壇浦合戦で遠矢を射ている。盛衰記―まず畠山が命じられるも、脚気等を理由に辞退する。畠山は代わりに那須兄弟を推薦するが、兄十郎は一谷での馬の故障と自らの負傷を理由に辞退し、代わりに弟与一を推薦する。与一も子細を申そうとするが、伊勢三郎義盛と後藤兵衛尉実基とに急かされて承諾する。松雲本―盛衰記と展開だが、射手を決める際、「伊勢三郎ヲ始トシテ、其レ射テンヤ、彼レハ叶ハジヤト評定」があった中、畠山は義経に召されるのではなく自ら進み出て弓を取り直す。そこで義経が「アノ扇射ラレナンヤ」と尋ねると「遠矢ナドハ仰ヲ蒙ルベク候」と言い、「サテ誰カアラン」と聞かれて那須太郎「助信父子」を推薦する(ただし「助宗」との混同あり)。「助宗」は一谷で肩を故障したといい、「子」の与一を推薦。命じられた与一は子細を申そうとはせず、「挟テ立タル扇ナレバ、何イツクヲ射ルトモ手ノ下ナリ」と思う。地の文には「我ト思フ人タノ中ニ与一勝ラレケルハ、時ニ取テ面目ナリ」ともあり、与一自身に消極的な様子は見られない。覚一本―後藤兵衛実基が与一を推薦し、義経が与一に命じると、一度辞退する。義経が激怒したので、与一は二度の辞退はよろしくないだろうと判断したのか、受諾。南都本・屋代本・中院本―覚一本と同展開。幸若舞曲『奈須与市』―源氏勢の中から射手を選ぶ場面はなく、いきなり義経が与一を召す場面から始まる。与一の辞退→義経からの督促→与一の受諾という展開は覚一本に同じ。

以上を大きくまとめると、三つに分類される。a 義経の命令に与一が直ちに服従する(長門本・延慶本・四部本〔四部本はaとbの中間に位置付けることもできる〕)、b 義経の命令を与一が受諾するまでに与一以外の人物達のやりとりがある(盛衰記・松雲本・長門切)、c 義経の命令を受諾するまでに与一の辞退と

義経の忿怒がある（南都本・屋代本・覚一本・中院本）。

屋島合戦記事を載せる長門切は多く確認されている。今後も発見が続く可能性があろう。それらが揃って出現すれば、ある程度までの原本の復元が可能かもしれない。

【参考文献】

- ・松尾葦江『軍記物語論究』（若草書房、1996年6月）第4章「読み本系平家物語の成立と表現」。
- ・平藤幸「与一射扇受諾本文の諸相」（松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院、2015年5月）。

8 『平家物語』長門本 袋綴2冊 存巻1・2 萩明倫館旧蔵（江戸時代中期）写

2巻2冊（20巻、20冊の内）。袋綴。28.7×22.0cm。後補改装濃縹色表紙（僚巻の山口大学本も同種の表紙だがより古く、「第壺／号明治卅五年七月／山口県師範学校／二〇冊ノ内」のラベルが貼付されている。これがない鶴見大学本の表紙は改装）。左肩に金砂子散短冊を貼付するが、外題は未記入。内題「平家物語巻第一（・巻二）」。奥書・序なし。目録は巻1欠、巻2有。半丁行数8行（和歌一首2行書）。墨書、朱書、鉛筆書の傍記がまある。鉛筆書は山口大学本にはなく、山口大学から離れた後の書き入れだろう。印記は、①楕円形朱印・篆書「長門図書」。②四周双辺隅切角朱印・篆書「武本」。③正方形朱印・篆書「周防国／明倫館／図書印」。④長方形朱印（⑤⑥同）「丙寅改」。⑤「戊辰改」。⑥「辛未改」。⑦正方形朱印・篆書「山口県／師範／学校」。⑧長方形朱印「明治十四年改」。⑨正方形朱印「金合／文庫」。⑩正方形朱印・篆書「小林／蔵書」。

巻三～二十は、山口大学図書館が所蔵する（以下、鶴見大学本と山口大学本を総称する場合は「萩明倫館本」と言う）。山口大学本には無く、鶴見大学本にのみ存する印記は、上記⑨の「金合／文庫」印と⑩の「小林／蔵書」印の二つである。これが、山口大学本から離れた後の所蔵者、かつ鶴見大学図書館蔵となる前の旧蔵者（同一の個人）を示すものと考えられる。また、①の「長門図書」印と②の「武本」印は、国会貴重書本にも押されていて、一時期は萩明倫館本と国会貴重書本とが同様の環境下に管理されていたことを窺わせる。萩明倫館本の書写は、藩校明倫館創建（享保4年〈1719〉）以前と考えられるが、以後だとしても、藩校創建時期を大きくは下らないであろう。文久3年（1863）、萩藩庁の山口移転に伴い、山口と萩の明倫館が並立したり山口明倫館が存廃したりした経緯も手伝ってか、まず丙寅の年慶応2年（1866）に蔵書の検めを受ける（印記④）。印記⑤に戊辰とあるのは、明治元年（1868）11月に、萩明倫館が萩学校に改称されたのに伴う蔵書の検めのことであろう。さらに、印記⑥に見られるように、辛未の年明治4年（1871）7月に、廃藩置県により、萩学校が県立となったのに伴う蔵書検めを受ける。その後また、山口県教員養成所を前身とした山口県師範学校が生まれ、経緯は不明ながらも、萩明倫館本は、県立萩学校から山口県師範学校に移管され、印記⑦・⑧に見られるように、「山口県／師範／学校」の印が押され、明治14年（1881）に蔵書検めを受けるに至るのである。

その後、明治18年に山口県師範学校から改称された（県立）山口師範学校が、昭和18年（1943）女子師範学校と統合した官立（国立）山口師範学校となり、学制改革によって昭和24年5月に新制山口大学が発足し、山口師範が山口大学（教育学部）に統合されたのに伴い、同大学図書館の蔵書となった。また、これも経緯は全く不明ながら、巻1・2の両巻が巻3～20と分かたれ、「金合／文庫」「小林／蔵書」の印を用いる所蔵者のもとに収蔵されることとなったのであろう（昭和43～45年頃に同本を調査した松尾葦江によれば、明治35年の旧ラベルには「二〇冊」とあるも、調査時には既に巻一・二が欠本であったという）。

萩明倫館本二20巻には7手の筆跡が認められ、7人の寄合書きと考えられる。毛利家ゆかりの国会貴重書本・明治大学本とは、そもそも書型と字面高さが概ね一致しているが、両本とは同筆の箇所があり、書写者に同一人が含まれていると考えられる。国会貴重書本は元禄頃から宝永にかけて長州藩の「右筆」であったという5名を含む9名が書写した本で、明治大学本がその親本と見る説が行われてきたが、そうだとしても、そこに萩明倫館本が関与した可能性が高い。また、萩明倫館本が国会貴重書本に先行すると見られる。同本の孤立する異同には、文脈の上で妥当性があると見てよい箇所も認められる。

書物の体裁や印記の様相等からも、萩明倫館本は藩としての公式性の色が濃く、長門本の最重要の伝本の一つと見てよいであろう。

登録番号：1347401-1347402

【参考文献】

- ・松尾葦江「長門本平家物語の伝本に関する基礎的研究」（『軍記と語り物』10、1973年12月。のち『平家物語論究』（明治書院、1985年3月）に所収）、「長門本現象をどうとらえるか」（『國學院雑誌』107—2、2006年2月。のち『平家物語原論』（笠間書院、2008年8月）に所収）。
- ・村上光徳「『長門本平家物語』流布の一形態—山口県文書館所蔵毛利家文書の場合—」（『軍記と語り物』13、1976年12月。のち松尾編『長門本平家物語の新研究』（花鳥社、2024年10月）に所収）。
- ・麻原美子「長門本『平家物語』初期伝本をめぐって」（麻原・犬井善寿編『長門本平家物語の総合研究 論究篇』（勉誠出版、2000年2月）。のち『平家物語の創成』（勉誠出版、2014年2月）に所収）。
- ・平藤幸「萩明倫館旧蔵長門本『平家物語』首両巻をめぐって」（関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓』5、2017年12月）、「萩明倫館旧蔵長門本について」（松尾編『長門本平家物語の新研究』（花鳥社、2024年10月））。

9 『平家物語』長門本 袋綴 20冊（江戸時代中期）写 笠栄治氏旧蔵

藍色表紙。縦28.0cm×横19.0cm。表紙左肩楮紙短冊「幾（巻数）長門平家物語」（本文とは別筆・巻5、9、11、12、15、17～20は題簽剥落）。見返し、本文共紙。目録題（巻1、9、11、13は目録なし）及び内題「平家物語巻第幾（巻数）」。

料紙、楮紙。毎半葉9行。字面高さ、約23.7cm。数筆の寄合書。蔵書印等はないが、笠栄治氏旧蔵本と推定される（松尾葦江氏「長門本平家物語伝本一覧（補遺・新出伝本）」『長門本平家物語の新研究』所収）。

登録番号：1437524-1437543

10 『平家物語』長門本 袋綴 18冊 欠巻5・20（江戸時代中期）写

渋刷毛引表紙。縦28.7cm×横20.8cm。外題、表紙中央打付書「平家物語第幾（巻数）」（本文とは別筆）。見返し、本文共紙。目録題（巻1、9、11、13は目録なし）及び内題「平家物語巻第幾（巻数）」（巻15内題あり）。料紙、楮紙。毎半葉10行。字面高さ、約19.8cm。印記、各冊に壺（鼎）形印（中央に「書」（篆書）」を押すが、印主未詳。国文学研究資料館松野陽一文庫蔵「石清水若宮歌合」に同印が確認できる。同筆の朱書入あり。別の長門本との校合か、要勘考。前掲「長門本平家物語伝本一覧（補遺・新出伝本）」未所収。

登録番号：1352183-1352200

9、10の掲出箇所は巻11の安徳天皇入水の場面。『平家物語』諸本の、安徳天皇入水時の髪の様子は以下のとおり。

- ・延慶本「黒クユラ／＼トシテ御肩ニスキテ御背ニフサ／＼トカ、ラセ玉ヘリ」。「黒ク」の前に「御髪」とあるべきか。
- ・長門本は、この場面には不記だが、建礼門院の入水（失敗に終わる）などを記した後に、「御すがたかみもゆら／＼として御かたすぎ、せなかにふさ／＼とかゝらせ給たり」と描く。
- ・源平盛衰記「御髪黒クフサヤカニシテ、御背ニ懸給ヘル」。
- ・四部合戦状本「御髪黒クシ由良々々トシテ過キ御肩御背セ中 カ懸リ房々サ」。
- ・南都本「御髪クシ黒クチウ／＼トシテ御セナカ過サセ給タリ」。この「チウ／＼」は、漢語で、垂れ下がるさまをあらわす擬態語「沖沖」か。
- ・松雲本「御髪黒ク房々ト御肩過キ、御脳ウナ後シニ懸ラセ給ヘリ」。
- ・屋代本「御クシ黒クユラ／＼ト、御背過サセ給ヘリ」。
- ・覚一本は、「御ぐしくろうゆら／＼として、御せなか過ぎさせ給へり」としつつ、この後に「びんづらゆはせ給て」との記述がある。これをめぐって、諸説が展開されている。
- ・中院本「御くしはくろ／＼として、御せなかすこしすぎさせ給程なり」。

【参考文献】

- ・延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 第六本（巻十一）』（汲古書院）

11 仮名書状 1軸(3通)〔平安時代末期〕写 伝八条院(暲子)筆 高橋亨氏旧蔵

鳥羽天皇の皇女で、美福門院得子を母とする八条院暲子(1137-1211)を伝称筆者とする仮名書状。縦31.4cm、横約35cm～51cmの料紙(楮紙)6枚、各2巻続きの3通の書簡を卷子仕立てにする。裏面に装飾経が書写されていたとおぼしく、文字と界線(金界か)らしきものが透けて見える。暲子の筆跡と断定はできないものの、いずれ高貴な女性の供養経であったと思われる。3通は「上三」「上一」「上二」の順で継がれている。「上」と記されていることから、元来はさらに多くの書状が存していたことが推測される。極札等はなく、箱の蓋に「御巻物 八条女院御筆 仮名文」、本巻を包む袱紗に「八条女院御筆仮名文 御巻物附」とあるのみ。伝来は不明であるが、箱に貼られた蔵書整理用のラベルに一つ葉葵(朱)が刷られており、松平家等の旧蔵品かと推測されている。

「上一」は「〔三〕条どの」宛の書状。久曾神昇氏は三条実房と推定。湯治中に「二条の中納言」の妹の「吉田の中納言の女房」と姉妹の「藤一条の女房で帥殿とか申す人」と出会った時のことが書かれているが、久曾神氏は二条中納言を平時忠、吉田中納言を平宗盛とし、承安元年(1171)4月21日以降治承二年(1178)4月5日以前の書状と推定する。

掲出の「上二」の文面は以下の通り(久曾神氏の翻刻による)。

- ①まことにかはり候しるしと、めでたくうけたまは〔り〕候御事、いつしか申たく候つるに、御まがれ師しばかりまいらせて、ためらひすごし候ぬるやうにおぼえ候に、めでたき御ふみたまはりて候も、返々うれしく候。
- ②まことに心もとなく候つる御事、さだませおはしまして、心やすく見まいらせ候はむする、うれしく候。
- ③又、なにごとも御心のうちにおぼしめすさまにて、いとをし。
- ④御かたの御事、御いのちいくちよもとなく、ひさしき御よはみにて、すぐれたる世のだいじの御ことにて、見まいらせさせおはしますもかい候て、いかにいかにうれしうめでたく候。
- ⑤心やすく思ふまいらせさせおはしますらむとおぼえ候。なに事よりもよき御めのともいでき候てな。
- ⑥なにごともはばかりずに申うけたまはりたく候。おのはるほどには、かならず申候はむよ。
- ⑦なをうれしく、御文おきがたく候。

①から何事か慶事の報告に対する返信と判明するが、幼児のもとにおかれる「御まがれ師し(魔除の獅子)」を送ったこと、⑤に「よき御めのと」を用意するように伝えている点などから、この慶事は某の出産であると推測できるという。久曾神氏は、「上三」が治承3年(1179)正月頃書状と推定できることから、本状も同じころの書状と仮定すれば、この時に誕生したのは高倉天皇の第一皇子(後の安徳天皇・治承2年11月12日生)である可能性を説く。とすれば、本状のあて先は「徳子の難産と念願の叶った無事の出産をめぐる八条院の時子(*徳子母)にあてた返信とみるにふさわしい」と考えられる(高橋亨氏)。

「上三」は前状に次いで、「皇子誕生後に徳子の別の近親」にあてた書状と推測される。前段に「御かたがへの行幸」のことが記されているが、久曾神氏は治承3年正月の朝覲行幸のこととし、高橋氏は高倉天皇が誕生した皇子に会うために、方違を口実に徳子のもとを訪れたとする。後段には「こまつどの」(平重盛)の「御のぼり」(比叡山延暦寺に上る出家)については「さも候まじき」と記されている。重盛が実際に出家したのはおよそ半年後の7月28日のことであった。

登録番号:1426346

【参考文献】

- ・久曾神昇「伝八条院筆仮名書状」(『平安時代仮名書状の研究 増補改訂版』・平成4年8月・風間書房)
- ・高橋亨「伝八条院暲子かな書状と平家の興隆」(古代文学研究第二次28・令和元年10月)

展示担当

表紙（ポスター）：伊倉史人（文学部ドキュメンテーション学科）

解題 1～5：田口暢之（文学部日本文学科）

解題 6・参考：伊倉

解題 7～10：平藤幸（文部科学省教科書調査官・本学非常勤講師）

解題 11：伊倉

第 163 回 鶴見大学図書館 貴重書展
令和 7 年度 中世文学会春季大会開催記念
新古今和歌集と平家物語

2025 年 5 月 21 日（火）～ 6 月 21 日（土）
於 鶴見大学図書館 1 階 エントランスホール 入場無料
月曜日～金曜日 8:50-21:00 土曜日 8:50-18:00 日曜日 休館